

坂根巖夫

慶応義塾大学教授

## デザインと芸術の境界領域の喪失

見えない物質世界の内外を遮る皮膜の構造を透かして、科学の進歩が情報の透明感を拡張してきたように、現代の文化のカテゴリやジャンルを隔てていたさまざまな境界面が溶解し、一見、自在に往来し、見通せる可能性が高まってきている。それをクロス・カルチャーとかトランス・カルチャー、あるいはマルチ・メディアの文化とさまざまに呼ぶことはできるが、残念なことに、その界面のリアリティそのものは、記号処理が生み出した仮想的な知覚の限界を超えられず、期待と不安、透明と不透明が共存するアンビバレンツな状況が続いている。

マサチューセッツ工科大学 (MIT) に科学と芸術の境界領域を結ぶ視覚芸術センター (CAVS) を創設したジョージ・ケベシュは、かつて科学の目がもたらした新しい知覚の風景を「ニュー・ランドスケープ」と称したが、いまのメディアの情報の知覚がもたらした風景は、むしろ「トランス・スケープ」とでもいうべきかもしれない。その透視物のリアリティがときにヴァーチャルに見えれば見えるほど、他方ではその不安を克服するために、素朴な肉體性の復権や回帰の行為としての知覚のパフォーマンスが新鮮に感じられ、実体のないブームが次々に人々の関心を揺り動かしては通り過ぎていく。

O.B. ハーディソン Jr. はその著「天窓を抜けて消えてゆく——20世紀の文化とテクノロジー」(下野・水野訳、白揚社刊)のなかで、かつて確かだった自然・歴史・言語・芸術・人間の概念そのものが、情報化文明のなかで曖昧化し、消失していく時代的状况について、きわめて覚めた目で告発している。

ここに来て、従来のデザインとアートの明確な境界も明らかに喪失し、視点の次元を高めて透視するトランス行為によって確認せざるを得なくなっている。今回、あえてメディア芸術やインタラクティブ芸術の領域にまで踏み込んだ理由は、そんなトランス・カルチャーへの視点の今日的な重要性を考えたからに外ならない。

## 建築の皮膜化と肉體化のトランス現象

情報化を背景に希薄化する物質性の皮膜的実在感を代表する建築デザインと、それと対照的な人間の有機的、生物学的な胎内空間志向の建築デザインのふたつが、いま世界的にも相補的に共存しはじめている。日本ではさしずめ、伊東豊雄の皮膜建築と、牛田・フィンドレイの胎内的曲面建築の対比が象徴的である。

牛田らの胎内空間への志向は、一方ではガウディやシュタイナー派のもつヒューマンな空間を暗示させながら、実際にそれを裏方で可能にした技術が、薄いコンクリート皮膜内部をささえるトラスシステムの構造のうえに乗って実現している点では、視覚のロマンと、内面の科学の調和を見いだそうとしたさりげない演出の結晶といってもいい。しかも、その皮膜の内外を、国際的な作家を招いて、光、音、映像、写真、詩、パフォーマンスの舞台に仕立て、マルチ・メディア的作品に総合した実験精神は、まさに現代のアーティストに共有されたトランス・アートへの意識を象徴している。

[写真・図版提供]

アートフォーラム谷中

ウシダ・フィンドレイ・パートナーシップ

サウンドカルチャー実行委員会

坂根巖夫

サビエンス

土佐尚子

中村滋延

藤本由紀夫

向井周太郎

ARS ELECTRONICA CENTER

VEREIN

Kunsthochschule für Medien Köln

NTT インターコミュニケーション

・センター推進室

Myron KRUEGER

ORF LANDESSTUDIO OBER-

ÖSTERREICH

Pattie MAES

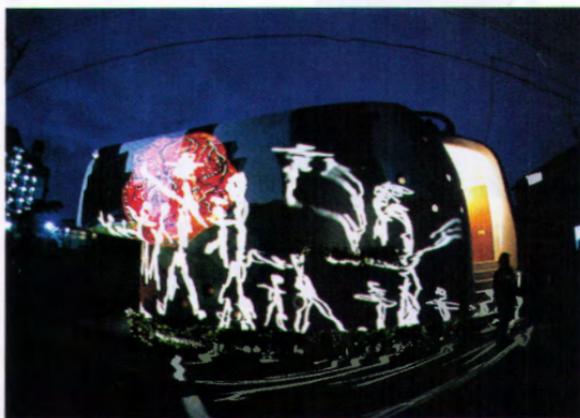
Zentrum für Kunst und Medien-

technologie Karlsruhe

(敬称略、五十音・ABC 順)



①



②

①牛田英作、キャサリン・フィンドレイ設計の「トラス・ウォールハウス」。東京都町田市鶴川の小田急線沿いに1993年5月完成。オープニングに、多彩なジャンルのアートがこの住宅の内外を舞台に行われた。P：小林研二  
 ②その外壁をスクリーンとして投影した、アメリカのレニ・シュウェンティンガーのライト・アート「都市の心臓、棲み家としての身体？」の1シーン。皇居中心の環状線内部の機能を、心臓のイメージで暗喩。P：小林研二  
 ③中村滋延作曲の「電脳音舞一四大輪廻」の1シーン。舞台上の小道具のオブジェがセンサーを介して、ダンサーの動きや位置に反応し電子音を立てる作品（1993年11月19日、京都府民ホール「アルティ」で）



③